第5回研究発表会研究発表要旨
早稲田大学ドイツ語学・文学会

多義語の意味展開について ―話法助動詞 müssen をてがかりに―

宮 下 博 幸

自然言語ではひとつの表現に複数の意味が認めうることが多い。だがそういった多義表現に含まれるそれぞれの意味の間にはどのような関連があるのだろうか。本発表では普通多義語と見なされる müssen をてがかりにこの問題を考えてみたい。

語の意味は一般に人の脳の中に何らかの形で構造化されていると考えられる。その際にはある典型例（プロトタイプ）を中心として，意味的なまとまりを形成していると仮定しうる。müssen のような多義語の場合には，こういったプロトタイプが複数個存在していると考えられる。では müssen はどのようなプロトタイプをもっているのだろうか。

müssen には必要性・不可避性・確実性のプロトタイプがあるといえる（宮下博幸(1996)：話法助動詞 müssen のプロトタイプ構造，Angelus Novus 第24号，99-119頁参照）。

これらのプロトタイプのフレームは次のように表すことが可能である。

必要性　Q …> Y → Z (Q＝話法要因　Y＝必要性が課される主体［意志的］　Z＝行為)
不可避性　Y → Z (Y＝主体［非意志的］　Z＝行為)
確実性　E …> Y → p (E＝判断の根拠　Y＝判断の主体　p＝判断される内容)

さて本題である多義語の意味関連のあり方には2つあると考えられる。

まず1つはすべてに共通する意味があるという点で関連しているという場合である。müssen の3つのプロトタイプに共通する関係は抽象的に次のように表すことができる。

□ …> ○ → △

この抽象的な「因果関係」の意味関係のうちの□，○，△の部分が様々な意味領域において具体化されたものが，それぞれのプロトタイプであると考えることができる。またそのプロトタイプどうしを結びつけるのに，この抽象的な意味関係が大きな役割を果たしていると考えられる。このようなフレームの構造の類似性があってはじめて，認知的に異なっていると考えられる3つの意味が，同じ語の下におかれることを可能にしているといえる。

もう1つは意味と意味の間が結ばれているという場合である。まず必要性と不可避性は連続をなしている。それぞれのプロトタイプがその両端であり，その間には無数の中間的な例が存在するといえる。その際原因となるものが絶対的であり，それと反比例して主語となるものの意志が及ばなくなればなるほど，不可避の様相を帯びることになる。確実性の意味が不可避性から展開することに関しては，会話の含意の働きがあると考えられる。こういったことから不可避性と確実性との間にも，意味的なつながりを確認することができる。

以上のように müssen のそれぞれの意味は，抽象的な「因果関係」と呼びうる意味関係と，プロトタイプ相互の横並びの意味関係によって動機づけられている。